

慢性腎臓病とカルシウム(Ca)

カルシウム(Ca)というと皆さんは何を連想されますか？骨、歯、ミネラル、牛乳やビタミンDなどでしょうか。実は慢性腎臓病とCaはとても関係が深いのです。

腎臓はミネラル代謝調節に大切な役割を持っており、CKDによる腎機能の低下によって活性型ビタミンDが欠乏して血清のCaが低下、また腎臓からのリン(P)の排泄も減少するため、低Ca+高Pが頸部にある副甲状腺ホルモンの分泌を亢進します。このホルモンは骨から血液中にCaを動員するため、結果として骨が脆くなる、骨粗鬆症の増悪を起こします。また骨から動員されたCaが動脈などに沈着し、石灰化による動脈硬化を引き起こすとも言われています。

逆にCKDのない方においても、骨粗鬆症の治療のために服用するビタミンDには注意が必要です。適量であれば問題ないのですが、過剰な量のビタミンDの投与によって高Ca血症となり、全身倦怠感、消化器症状を引き起こしたり、時には急性腎不全となつて当科を受診することがあります。予防のためにはCa値の定期的なチェックが必要です。

頻回に尿路結石症の発作を起こす方でも、血液のCaの値に注目する必要があります。もしCaの値が高ければ(副甲状腺の良性腫瘍による)副甲状腺機能亢進症によつてリン酸カルシウム結石が出来ている可能性があるからです。この場合には副甲状腺の摘出手術によつて治癒することが可能です。

済生会八幡総合病院

腎センター 部長

医学博士 安永親生